2012 年 11 月 24 日～25 日
第 39 回国際学生セミナー
八王子セミナーハウス

東アジアを考える

中国の風水・日本の水土

～地域からの発想～

上田信（立教大学）

1. 中国最小の自然保護区

- 宗族が護った樹林　、福建省南靖県・楽土自然保護区
- 中国で最も小さな自然保護区。1970 年代まで、華南トラが生息していた。
- 南靖県和溪鎮楽土村（六斗村）にある自然保護区。面積 20ha 余。
- 東南沿海地域にある亜熱帯植生。1959 年に伐採禁止。1980 年に正式に保護区に。
- 宗族と保護区

  楽土村：黄姓が集住。黄姓：1364 年（明・洪武 2 年）に始遷祖・黄英が移住してくる。林氏に入贅。子・黄孟昌。黄孟昌が昭穆を定め、宗祠を建てる。

  輩字「英孟志延崇---」

  台湾にも移住。→宗祠の再建には、台湾からの資金援助もあった。
- 黄孟昌：風水の知識があり、「臥牛」の地形を選んで宗祠を建てる。
- 祠の前が「牛眼」、背後にある岩を「牛角」に見立てる。風水上の適地であったために、子孫が繁栄したと解釈される。
- 乾隆年間に台湾の子孫からの資金援助を得て増築。文革中に消失し、1993 年に再建。
- 風水の伝説

  ある年、１人の風水先生がこの地を通り抜けたとき、山の形が牛に似ていることを見て、風水宝地であることを知る。そして「この山は神牛の土地であり、将来、この村から必ず大官が出る」という。轎を担いでいた地元の者から、山の背後に溝があることを知り、「大官は出るが、その後に悪党が生まれ、一族を衰退させるだろう」と言い添える。数世代の後、黄興という名の無法者が現れ、賭博の資金を得るために、風水林として保全していた山の木を伐採し売り払う。
- ある夜、族長の夢に神牛が現れ、宗祠の中庭に油を撒けという。族長は、夢のお告げの通りにする。賭博から帰ってきた黄興は、宗祠で寝ようと思って中に入ったところ、油に足を滑らせ昏倒、打ち所が悪く、死んでしまう。
- 村の伝承
- 「六斗山の草木は神牛の毛である。もし樹林を破壊する者が現れると、神牛の怒りを買い、黄興のような非業の死を遂げることになる」この伝承→樹林の保全。それ以後、村は繁栄を続けた。山全体の保全
- なぜ、山ごと保全するのか？

福建の風水林の特色：１つの山塊を保全。

楽土自然保護区のほかにも、万木山自然保護区など、風水林として植生が維持されたケースが見られる。スイショウなどの希少植物も、風水林として保全されている。

・　風水木

・　風水論が抽象化され、樹林全体を残さなくても、ポイントとなる樹木を限定する。風水林ではなく、風水木。さらに抽象化が進むと、樹木の代わりに「塔」で代替。

・　なぜ、福建では、風水論が樹林を保全することができるのか？

２．風水書

・　地域社会と風水

宋代に完成されたと推定される『葬書』以後、それこそ無数と言っていいほどの風水書が編纂された。多くの風水書が類型化された記述をしているなかで、明代後期に福建省懐玉県の徐世彦が編纂した『地理独啓玄関』（以下、『玄関』と略す）は、地域と時代とを色濃く反映している点で興味深い。

・　山川の祖（根源）

・　多くの風水書は、龍脈の根源は西域にそびえる崑崙山であると記すが、『玄関』は、山川の祖（根源）は、須彌山。須彌山からは、四本の〈気〉の流れる幹線が発し、そのうちの一本だけが崑崙山を経て、中国の領域内に入るユーラシア大陸の全域を覆うような地理観が示されていることは、注目に値する。龍脈は崑崙山で三つに分岐する。

・　三大幹は、北から鴨緑江、黄河、長江が境界。

　北幹の龍脈は、鴨緑江以南、黄河以北の山系

　中幹は黄河以南、長江以北の山系

　南幹は長江以南。チベット高原→雲南→華南一帯

・　覓龍

風水で山の形を観ることを〈覓龍〉という。「覓」は、捜し求めるという意味。大地を流れる〈気〉は、地表に活力を与え、土地を隆起させる。『玄関』には、「山はすなわち天地の磅礴の気の生成するものなり」とある。「磅礴」は、みなぎる、充満するといった意味で、大地の気が鬱勃とわき上がり、山を造りあげる。

・　理想的な地形

・　風水先生の見方

・　　山を目の前にして、風水先生はその形状から山の性格を解釈するところから仕事を始める。山の性格は捉えがたく、その吉凶も定式がない。目の付け所は、大地の〈気〉が山をどのように生成させているのかを見極めることにある。山を安定して変わらない地形として静態的に見るのではなく、いままさに盛り上がろうとする運動の一コマとして、動態的に観る。

・　〈余気〉

こうしたあふれ出る〈気〉に関する議論は、「余気論」として展開されている。

〈余気〉（ありあまる気）は、まことに風水にとって不可欠のものだ。〈穴〉（気が集まるポイント）の前、毛氈のしとねほどの広さに、〔あふれ出た気が〕及ぶことを単に指しているのではない。呉景鸞は「〈余気〉が数十里先まで及ばなければ、王侯の地（王侯を生み出すほどの生気を持つ場所）とすることはできない」と言っている。〈穴〉の前の〈余気〉は、数十里を覆い尽くす。故におおよそ大地が規模の大きな配置を形作ると、〈余気〉は必ず前後左右をあまねく潤す。人家は必ず〈余気〉に群がり集まる。……

大地には、このように〈余気〉が多い。もし周囲三十里、五十里に人家がなければ、山奥の源流や僻地のくぼ地、あるいは急峻な山嶺などの地では多くの樹木がいかめしく、虎や豹が潜み、蜂や蛇が渦巻いている。そんな人跡が及ばない土地に、よしんば〈龍脈〉の本流の〈穴〉があったとしても、これは自ずと陰の〈気〉が深く潜行した脈である〔ために、人が集まらない〕。富貴に至らせる力をもつとしても、けっして人口をにぎわすことはない。ただ人家がかまびすしく勢いのあるところでは、すなわち〈龍脈〉の本流が凝集した〈吉穴〉（優れたポイント）の〈余気〉が、遠くまで溢れ出て、感応するものを招き集めている。要するに、人は地の〈気〉を得て旺盛となり、地は人の〈気〉を借りて勃興するのである。……。

人跡が及ばない手つかずの自然のただ中に優れた〈穴〉があった場合、そこからあふれる〈余気〉は山地を下って人の住む平地にも及び、生気を与える。

・ 村落の風水：〈水口〉について

『玄関』が次のように説明している。「おおよそ一村一塢には必ず一カ所の源頭の水がある。二つの山が交わるあいだから流れ出るものを、〈水口〉という。本当の〈龍〉と〈穴〉と〈砂〉と〈水〉とが束ねられている場所であり、いわゆる大いなる太極圏と呼ばれるものである」（『玄関』巻三、「水口論」）。

〈水〉とは〈気〉を滞留させずに流れ去ってくれる河川の流れ具合をいう。風水の四大要素がまさに交差し、〈気〉の原初の姿である〈太極〉の相を示しているところが〈水口〉であるという。集落の生気をコントロールする重要拠点こそが、〈水口〉なのである。

・ 〈水口〉の重要性

『玄関』には、「風俗が富貴であるかを見極めようとするならば、必ず〈水口〉を観よ」とある。もし水の流れが細ければ、その集落の風紀は驕り乱れており、土が舞い上がって石が混じっているようならば、吝嗇を生じる。

・ 〈水口〉の樹林

樹木が侵害されているならば、集落の経済は振るわない。〈水口〉は集落の風俗・繁栄を左右するポイントであると考えられたために、その土地に生えている樹木を大切に保護したのである。

３．　トラの森と風水

・　トラ保護センター

・　華南虎・アモイトラ＝（*Panthera tigris amoyensis*）

トラの繁殖と野生化は困難。

遺伝的な偏り。野生化させるための樹林が寸断されている

・　緑の回廊

野生動物が保護区に封じ込められると、近親交配が進み、遺伝的な偏りが強くなり、生存率が低下、最終的に絶滅する。緑の回廊で複数の保護区を結び、野生動物が自由に行き来できる条件を作る必要がある。

・　風水と「緑の回廊」

福建の風水は、「緑の回廊」に関する住民のあいだの合意形成を促進する可能性。

４．日本の「水土」

・　熊沢蕃山

１７世紀に日本が直面する生態環境の劣化に、いちはやく気づき、環境の保全に取り組んだ人物に、江戸時代の儒学者である熊沢蕃山がいる。

『集義外書』巻一には、製塩業や製陶業を藩の財政のために振興すべきかどうか、という問い掛けに対して、次のように答えている。

・　神気

塩浜と焼物との、山林を尽くすことは大なる事。それ山林は国の本なり。春雨・五月雨は天地気化の雨に候。六・七月の会田には気化の雨はまめにして、夕立を以て田畑を養えり。夕立は山川の神気のよく雲を出し、雨を起こすによれり。山に木ある時は、神気盛んなり、木なき時は、神気おとろえて雲雨を起こすべきちからすくなし。

しかのみならず、木草しげき山は、土砂を川中に落とさず、大雨ふれども草木に水をふくみて、十日も二十日も自然に川に出る故に、洪水の憂いなし。山に草木なければ、土砂川中にいりて、川どこ高くなり候。大雨をたくわふべき草木なきゆえへに、一度に河に落ち入り、しかも川どこ高ければ、洪水の憂いあり。

山川の神気うすく、山沢気を通じて水を生ずることも少なければ、平生は田地の用水すくなく、舟をかよはす事も自由ならず。これ皆山沢の地理に通じ、神明の理を知る人なき故なり。塩浜と焼物とを減ずとも増やすべからず。

・　神気の具体的イメージ

「先ほどは山に草木がしげれば、にわか水（鉄砲水・土石流）が起こる心配がないとおっしゃっていたが、山沢が気を通じて、神になるというのは、どういうことなのですか」という質問に対して、熊沢が自分の持っているイメージを語る箇所がある。 彼が掲げる具体例は、吉野熊野の大台ヶ原である。

・　大台ヶ原イメージ

下界では薄曇りていどであっても、山上の原野には雲霧が深く、谷に群がる霧のために、登るときには大雨のあったようにグッショリと身体が濡れる。雨が降らなくても、風向きによって雲霧が吹きつけ、山中から流れ出る宮川・熊野川・吉野川を潤す。雨は空より降るのではない。ただ「神気」が原上にみち、「水気」が風を横切る。 「山沢が気を通じる」

・ 風水と神気

風水論とは異なる。風水論にある崑崙山から延々と山の連なりをたどって大地を気が流れてくる、という発想法は、熊沢にはない。 彼の「神気」は、その「水土」論と関わる。

・ 〈氣〉〔qi〕と「気」(き)

中国の〈氣〉: 崑崙山から延々と山の連なりをたどって大地を気が流れてくる。流れ至る〈氣〉

日本の「気」: 自然に精霊を見いだしていくというアニミズム的な感覚。湧き出す「気」

・ 水土

水土とは、たとえば大台ヶ原のような潤沢な降水と温暖な気候に適応した、多様な動植物が織りなす日本の生態環境、そしてこの生態環境に応じて発達した日本の文化、これが熊沢のイメージする「水土」である。

・ 陽国の水土

・ 「日本は太陽の昇る陽国 (生気があふれる国) であって、その水土に生まれる人は、生を重んじて死を軽んじる」(『集義外書』巻一六)、

・ 水土にもとづく神道

・ 「私は聖学（中国古代に説かれた理念を極めること）をしているけれど、儒学にこだわるわけではない。……天地の神の道を大道という。我が国には日本の水土にもとづく神道がある。大道には名はないけれど、我が国の道だから、何か一つ選べと言うのであれば、神道を取ることになる」(『集義外書』第六)

・ 「諸国山川掟」

・ 熊沢蕃山の思想は、当時の政治に直接、間接に影響を与えた。1666 年（寛文六年）に江戸幕府は「諸国山川掟」という法令を出し、諸代官に草木の乱伐を停止して植林を奨励、川筋で焼き畑や新田開発を行うこと禁じた。これは日本史の中でも画期的な法令である。この「諸国山川掟」の思想的な背景に、熊沢蕃山の主張と岡山での水土保持の活躍があったという指摘がなされているのである。

５．「水土」再生

・ 緑の地球ネットワークの活動 〈http://homepage3.nifty.com/gentree/〉